



## 針葉樹會報

通卷 第五十九號

關西だより 大阪 H・S・K生

六甲と云へばドライアウエイ、ケープルカー、ロープウエイ、ホテル、ゴルフ場、金持の別荘等を聯想し道頓堀や銀座等の延長の様に思はれ、雑誌にも書かれてゐるが、併しこれは神戸側で、東六甲へ行つて見ると仲々味のある山だ。暇のないO・Bには一日のコースに絶好だらう。お多福山と云ふ美しい山と六甲を狭む一寸した小奇麗な渓谷？で簡単に茶を沸かしながらのんびり出来るのは、この邊でないと出來ぬ。岩魚でも居さうな奇麗な水だ。秋の末晴上つた日にどす黒い大阪を離れてこの邊に来るごと、本當の渓谷を充分に満喫出来る。但し同じ東六甲でも私鐵指定ハイキングコースなるものには絶対に行くものではない。春や秋には人の行列で淺草の觀音様へ行つた様だ。凡ゆる格構をした老若男女、野次馬まで混つて、まるで六甲に大事件でも起つたのかと思はれる。この行列ハイキングの一つに五〇錢ハイキングと命名されたのがある。これは蘆屋一ロツクガーデン—六甲頂上のコースであ

るが、流石大阪の人間だけあって、ハイキングにも金額を名に付ける所仲々拔目ない。

冬になると頂上近くのゴルフ場でスキーが二三回出来る。これも仲々抜目なくケープルカーを利用せぬと入場料をさる。入場料付スキー場はこれが始めてだらう。雪と云つても二寸か三寸で而かも風が吹きまくるので、芝スキーをやる様なものだ。

× × ×

スキーと云へば關西の所謂スキー場は殆ど行つて見たが、この邊で一番と云はれる伊吹山でも岩原に毛の生えた様なもので、雪質を來たら悪いこと甚だしい。その他愛宕山、牧野、高野山等各れも行くべき所ではない。狭い上に京、阪、神、名の四都市の連中が集るので、その難倅たるや推して知るべし。これ等に比較して人も少なく良いスキー場は但馬地方だ。この地方には夜久野ヶ原、神鍋山、等の赤倉級を除いては冰ノ山を筆頭に妙見、祖父縦走の愉快なコースがある。各れも日歸りで行くご相當のびる。夜久野ヶ原は殆ど傾斜らしいものはないが、一ヶ所小高い所がある。丁度野澤のシアンツエのスロープの様なものだ。こゝで始めて渡邊九郎氏のスキーを拜見した。氏のスキーは物凄い程勇壯である。急なスロープを物ともせず矢庭に直滑降をやり出し、見る見る内に見えなくなつた。しばらくすると帽子も眼鏡もなく、全身真白になつて登つて來た。「中島君眼鏡を探してくれよ」悲しい哉氏は強度の近眼で眼鏡なくしては自ら探し得なかつたらう。しばらく探し廻つて、かなり下の方に帽子も眼鏡もその儘雪穴奥

深く見出す事が出来た。その上には四、五ヶ所大きな穴が開いてゐる。三四回は少くとも廻つて顔面をやつたことは明かだ。これにも懲りず盛んに猛烈な直滑降をやるのには流石に僕も度膽を拔かれ、岡田と顔見合せて呆然とした。

この夜久野ヶ原の北に妙見祖父岳がある。いづれも千米餘の低い山ではあるが雪は實に多い。吾々の行つた時は殘念乍ら唯霧中を滑るだけであつたが晴れた日ならすばらしいコースだ。一行は十合、岡田、北野と僕と四人、十合は相變らず元氣だ。學校を出るときスキーは駄目になると言ふが、渡邊氏や十合氏の益々元氣な様を見て安心した。氷ノ山はこの妙見の西北に當り、本名を須賀ノ山と云ふ。一六一〇米で、雪質は悪いが量の多いことは關西隨一だ。餘り人も行かぬし、春らしいのんびりしたスキーを味ふには絶好だ。頂上から西に向つて約三キロの滑降が出来る。

× × ×

要するに關西のスキーは山へ行つても殺伐さがなく、のんびり出来る點が取得だ。

スキーも終つて春ともなれば、新緑を憧れてゐる人々に、例の私鐵が何々ハイキングと勝手な名を付けて、盛んに呼びかける。

新聞の廣告も殆んどそれで一杯だ。四月には齊藤君が西下したので、會員が一人増えられた。歓迎會は五月に岡田君第二世出生祝を兼ねて盛大に行つた。尙都合のよいこには、神戸に出勤された入江氏の十合が大阪の會計部に榮轉され、關西の會員は皆大阪に集つた。

これから七月迄には山にも行かなかつたが六月末林君の來訪があり、久しぶりで會員が集まり座談會開催。現役の顔だけしたOBの老ひて益々盛んな御活躍を聞く。

七月二十三、四日は大阪の天神祭だ。會社も休みなので、齊藤と上高地に入った。こゝで現役の眞黒な顔を拜しうれしかつた。併し丁度引上げる日だったので直ぐ別れたが相變らず上高地では五月蠅型らしい。

最後に今迄の記録を要すると

- 1 鹿澤（十二月三十一日—一月三日）岡田、北野、中島
  - 2 伊吹山（一月十二日、三月十五日）
  - 3 夜久野ヶ原（二月九日）渡邊、岡田、中島
  - 4 六甲（二月二十三日）
  - 5 愛宕（三月一日）
  - 6 妙見祖父縦走（三月八日）十合、岡田、北野、中島
  - 7 氷ノ山（三月二十一日—二十三日）中島外一名  
以上
- ケーブルカー因縁嘶  
—家族大會追走記—  
浩一郎

今頃になつて家族大會の記事を書くことは頗るテンポが遅いやうだが、實はこゝが苦心の存する處で、家族大會には前々號で矢作君が親切に御紹介下されたやうに、追走に次ぐ追走を以てし、辛ふじて歸りの電車の中で一行に御目にかゝつたやうな始末だから、記事も其實況にふさはしいやうに、態々號を遲らして出すこ

いふ趣向は如何でしよう。

さて大會當日の四月二十九日の朝は、到底皆と一緒に新宿早發是不可能（註、前夜大阪發だから）なので、約一時間遅れて追走することを前々から約束してはおいたが、大船邊で起きて見るに如何にも空模様が悪く今にも一雨來さうだ。此天氣に女房、小供達は弱つたわいと思ひながら歸宅してみると、親の心子知らずでもう遠足くで張切つてどうにもならぬ。そんな譯で豫定より三十分も遅れて新宿を出た。處がこゝに困つた問題が起つた。といふのは先着の諸君は直に御獄に向つたのか、それとも針葉樹會の時の話のやうに樂々園に屯してゐるのか見當が付かない。御獄驛で告知板其他貼紙もがなと注意して視たが何も見當らない。樂々園行のバスの時刻を女車掌に訊ねるも、三十分も待たねば出ないといふ。えゝまゝよこハイヤーを飛ばし、入園料を拂つて園内隈なく搜したが影も形もない。仕方がないから樂々園驛から又電車に乗つて再び御獄驛に降りた。此間約一時間を費してゐる。今度は躊躇無く御獄行のバスに乗つて、ケーブルカーの瀧本驛まで馳けつけた。この驛には告知板はあつたが矢張り何も書いてはない。そこでこちらはこれから神社へお参りしてくると書いた。が一行が神社あたりに居さうな氣配は濃厚になつて來た。愈々ケーブルが登り出すと、子供達は今まで繪本でばかり見て居たケーブルを、今日は地で行くのだから大喜びである。こちらもそれに釣込まれてあの山、この川と名所案内に忙がしかつたのと、もう一つは例の粘土の參道が立派なコンクリート道路になつて居た

ので、商賣柄すつかり感心してそれに見されて居るうちに、降りのケーブルとすれ違つたのに気が付かなかつた。イヤ、氣が付いた時は大分兩車は離れて居た。（註、此降りの車に一行が乗つて居やうとは神ならぬ身の知る由もなく、又さうと知つたらあんなに悠々と晝飯を喰べては居られなかつた）さて、こゝで此すれ違ひのケーブルカーに絡まる一つの因縁話をしやう。抑々と改まるまでもなく、此ケーブルカーなるものはどんなに距離が長くとも其間を動いてゐる車は斷然二臺で、きっと眞中でそれ違ふこそ車井戸の釣瓶と全く同様である。つまり決して『一緒にならぬ』といふのが此因縁話のミソであり、又此追走記の中心である。さてここにAとBといふ不俱戴天の仇と狙ひ狙はる、兩人があつた。AはBを追かけ追ひまくり、Bは逃げて、逃げて世界中を逃げまはつてもう行く所が無くなつてしまつたが、不圖天來の妙案がBの頭に浮んだ。さうだ。ケーブルカーで一生暮さう！ さう思うや否やBはケーブルカーに逃げ込んだ。さはさせじと追ひかけてきたAは間一髪の差でBを取り逃がし其次のケーブルに乗つた。さあ皆さん判つたでせう。ここでAとBは眞中ですれ違ふ以外には、永久に上下に別れてしまつた譯である。一行と私は之を地で行つたのだから、すれ違ふ時に氣がついた處でどうにも仕様がない。逗子驛頭浪子と武雄といふ譯である。さて何も知らぬこちらは型の通り神社に御参りをして、大阪から持參に及んだ大阪鮓の御辨當を平げ、御丁寧にも食後見晴臺まで又行つて、もう一行には會へぬと觀念して悠々と御獄山ケーブル驛まで來て何心なく

告知板を見ると、さつき、自分が下の告知板に書いたと同時刻に上でも一行が私に書いてある。然も其宛名が「中川バカ一様」としてあるので、實は其瞬間怒氣心頭に發した。といふのはこういふチグハグな破目になつたのも元を質せば先發者の後續者への連絡の仕様が悪いからである。心勞を重ね、時を費し、金をかけて散々の不首尾のあげくに此宛名は人を愚弄するも甚だしいとカンくになりながら其次の文句を読んでみると、案外眞面目に「瀧本の御師の青木で盡飯を喰べて御待ちして居る」と書いてある。さてはさつきの降りのケーブルだつたのかと怒を收め勇氣百倍して、直に降りケーブルに乗り込んだ。(註、もし此怒氣が一行に通じたなら、又々上りケーブル中に一行を見出したであらう)瀧本驛の告知板を見る今度はすっかり恐縮して居る。例の坂道を小走りに下るご、張物板に半紙を貼つたのに「針葉樹會様御席」と書いて青木氏の門前の往來の眞中に突出してある。一兵も逃さぬぞといつた形だ。が座敷はガランとして一行は、はや立去つたらしい。聲をかければ青木氏は氣の毒さうに、「今しがた御發ちになりました。下のバス發着所の邊へ行かれた頃です」

といふ。もう距離はつまつた。御獄驛だ。ホームに出ると果して一行を乗せた直行電車が待つてゐた。

「ヤア會へてよかつた。これで恐られずに済んだーさいふのが私を迎えた一行の第一聲だつた。

ケープルカーよ、呪はれてあれ!

## 針葉樹第八號後記

林俊介

吾々が何かしら部の今後の成長に意味を持つ様にと大それた考へを抱いてこの八號に編輯を始めてから既に一年三ヶ月、發刊されてからさへもいつしか十ヶ月近く過ぎてしまつた。私は今、後掲の様な不行届の決算を會員並びに部員諸兄に對して御報告しなければならないのを、甚だ心苦しく思はずにはゐられないけれども、又結局これだけのことが出来たのも全く諸兄の心からの御援助の賜物と思へば、如何なる感謝の言葉を以て御禮申し上げてよいのか分からぬ。就中、快く玉稿を下さつた中川、吉澤、村尾磯野諸先輩に對して改めて心からの謝意を表したい。それと共に進んで廣告を下さつた、又發刊後賣る積りもなく、唯御同情の餘り御買取り下さつた會員方に對して、又終始私を助けて殆んど全部その校正を引受けて呉れた望月君、並びに廣告採り其の他について絶えず助けて呉れた柿原、小谷部兩君を始め多くの部員諸君に對しても厚く御禮申し上げたい。

省りみれば針葉樹第八號が上梓されてからの部にはいろいろな意味で苦しい事が多かつた。併し乍らそれにも不拘、小谷部君を代表に仰いでからは力強い結束の下に前へ前へと、學生登山團體として他に毫もひけをとらない地位にまで達し得たことは、何はともあれ喜ばしく、部のために祝福をせずにはゐられない様な氣がする。私が豫科に居た頃に較べて見れば、嗚呼いつしか先輩方の跡を追つて近く卒業しなければならぬ私の部での生活も、既に

短い乍ら五年餘の年月は経つてゐて、想ひ歸せばこの間の部の浮き沈みも、苦しみも樂しさも、今は生涯の感激として思ひ出としてやがて母校去る私の胸に、いつまでも大切にしまつて置きたいことばかり。感慨無量とでも言ふのだらう。針葉樹八號の巻末に書き添へるべきであつた諸氏諸兄に對する謝意の言葉と共に、打續く暑い夏の夜に眠れぬまゝに夜の白らむまで思はずも起きてゐる時など想ふ山への憧がれ、部への希望等一つ二つ書き残して置きたい。

私は今も考へてゐる。一體何を求めてかくも苦しみつゝ山へ行くのだらうか、私に對して浦松さんが下さつた名答も唯スポーツとして趣味としての登山の『仕方』しか教へて呉れない。もとより求めるものは名利でもなく、知識でもない。好きだから行く、それで我慢してゐる方が利口であつたのかも知れない。いや苦しい生活のはけ口、慰安として娛樂として吾々は登山するのだ、と言ふのが眞實かも知れない。今に想へば私が源へ源へと遡つて行くと思つてゐたあの細道は、既に梓も川下の越後への下り路であつたかも知れない。

その内容については既に前號に報告せられたが、部の最近の傾向、殊に此の夏の潤澤に於ける合宿について、私はそれが部で最も山を知る人の深い體驗から生れ出たものであるのを見て部の前途に大きな輝きを感ぜずには居られない。或ひは結果から見て他の大學山岳部の傾向と一致する所はあるかも知れぬけれども、それだからと言つて他校のすることを眞似して行かうと考へる人

があつたら、嗚呼今私が部に對して抱く心配は唯此れ一つ。一度び流れに巻き込まれては、如何にあせつても行方分らずに流される。次々と新しい部員によつて吾々の部が經營されて行くとき、その指導的地位に立つ人々の考へも亦決して見たり聞いたりした知識からではなく、豊富な山での體驗、長い部での生活を通してほんとうに心の奥底から湧き出る貴い抱負でもつて、しかも『一人よがり』でない様にあつて欲しいとばかり望んでゐる。

ヒマラヤへと日本の登山も擴げられては行く。併し翻つて静かに考へるとき、部としての大學生岳部の前途は暗憺たるものと言つてよい。流行は力ある大學山岳部によつて打破せられなければならぬ。

吾々の部に於ける一つの大きな仕事とも言ふ可き針葉樹の發刊それは九號十號と續けられて行くことが望ましく、又そつある可きものであるかも知れない。併し乍らこの種の報告書の意味も既に昔と同じものではなく、現實の場合その相手方となるべき人は全く異つてしまつてゐるとも言へよう。従つてその内容その形態又發刊の方法も亦變へらるべきものであるかも知れない。それらは皆會員の助力と今後の部員の研究によつて手際よく打開せられて行くものと信じてゐるけれども、何れにせよ『總ての仕事はその時の責任者によつて果されて』後々にいさゝかの禍根を残さないものでありたいと望んでやまない。

配布及入金内訳

寄贈及交換(三〇) 納本(二)

三二冊

會員贈呈(四四) 部員配布(二七)

七一冊

部室へ残置

二七冊

廣告先

三四冊

會員御引受

一一一冊

部員賣捌き

一一〇冊

不明

七冊

印刷所主寄附

一一一冊

宮川家より御寄贈金

一一一冊

別途諸收入

一一一冊

支拂顛末

一一一冊

印刷所皆濟

一一一冊

廣告募集及寫眞費(各五〇〇)

五七九・六八

荷造費送料諸通信費

一〇・〇〇

諸雜費支拂高

二五・七六

一橋山岳部基金一部に充つ

九・〇〇

宮川文庫創設費一部に充つ

八〇・〇〇

殘金(山岳部會計に繰入れ)

一〇・一〇

備考

計

二六

七一四・八〇

1 部殘置二十七冊中五冊は委託、九冊は未回収、現在數十三冊

2 印刷所よりの請求は原價の由なれど所主の好意により上記の寄附を受けたり、謝意を表す。

3 宮川家よりの御寄附は直接基金へ繰込む可きなれど種々の都合により一旦針葉樹會計へ編入せり。

4 右會計の中の若干の未收金は立替あり。

5 不明の七冊は主として小生記帳の不備によるものと思はる。深く御詫び申します。

### 寄せ書き

時 九月二十六日午后十時

所 國立山岳部室月見宴

雨だれの音はげしくなり部室にて杯を重ねたり月見かな  
シユー／＼の音をかこみて飲み明かしたり陣馬ヶ峯の月を思ふて  
孫さん倒れて學生の氣勢大いに上り雨盛なり國立の月見かな

今夜の秀逸は増山の實力だつた。いくら飲んでもケロリとしたものの、蛙に小便か、だんまり何とかださうだ。何しろ御大孫さん倒れてもシャー／＼してゐる處何よりの證據だ。併しこれありて暫く先輩陣の堅陣?を守り得たと云ふべし。學生連は良い氣になつて安曇節を歌つてゐる。

八人の中三人倒れたのだから盛會押して知るべし。十五人分を半分の人數でやるんだからさもありなん。只踊手近ぢやんなきは玉に瑕なり。

如し。

雨雲にかくれし月を募ひつ、集ひし酒のうたげ嬉しも

(小谷部)

『陣馬山觀月の宴』御案内を發送するのに手傳つて呉れたオフィスのメツチヘンが、午后二時頃から降り始めた雨を眺めて『今日は殘念ですね』と同情してくれた。あいにく忙しくて『雨の時は國立』といふので豪雨の中に部室に馳せ付けて見れば既に宴酣。幹事ホツと一安心、集ふ者べて八人。正に國立の森をゆるがすに餘りあり。報告終り。

(皇帝)

月見の宴にて陣馬山に行かむとせるに、秋雨に襲はれ國立の小舍にて酒盛をはれる時に物せる句二三、呵々大笑。

秋雨に蟲の音絶えし月見かな

武藏野にさんざ降りけり秋の雨

山小舎に名月見えぬすゝき哉

二三人月見に集ひし秋の雨

(重吉)

私は實力を發揮して、三角氏と刺しちがへました。孫サンも倒るゝ事あり。皆んな意外のおもゝちです、人數は八名、外は秋雨でしんみりしたお月見です。例によつて月は一向見えません。

(編者)

### 山岳部報告

日誌(七月後半)

私は實力を發揮して、三角氏と刺しちがへました。孫サンも倒るゝ事あり。皆んな意外のおもゝちです、人數は八名、外は秋雨でしんみりしたお月見です。例によつて月は一向見えません。

(力之)

雨が降つても、月が見えなくとも、恒例の月見はやはり良いもの。呑んだり、歌つたり、寝込んで了つたり。(番公)

まづ潰れたのはカンチヤン、ついで三角氏。孫さんは用を足し

(三 角)

に外に出るのが、頻繁で且つ長いと思つたら……。三角氏や干瓢氏の目覺めた後も、なほ桃源に遊んでゐるのは彼、孫さんだ。

『今夜は記念撮影をやる役が私に廻つて來たが、フランシュがなにのこ、潰れた顔を入れるので、苦心慘憺した。』(増山)

後書き——僕等の恒例のお月見はどうしてこうも天氣が悪いんだらう。まして今年は陣馬峯頂上の小屋を借切つてのお月見を目論み、小柳幹事が實地踏査までやつたのに、前日迄のいやに好い天氣が、當日の朝『雨しらず』が出て、午后から豪雨さきてゐるんだからあきれてしまふ。

でも、集つた。中川、松木、小柳、小谷部、小林、望月、森脇増山の八人。飲む程に醉ふ程に、歌を物するもあり、句をひれるもあり、大声放歌するもあり、一夜の歡を盡して寝に就いたのは午前一時。孫さんの漫談を翌日の午前に延ばさざるを得なかつた理由と、八人の會の寄書が七人であるわけはもうわかつた筈だ。翌二十七日午前十一時、豪雨をついて歸宅す。

(編者)

### ○本科山岳部獨立

七月八日(水)

本科山岳部が正式の部に加入しなかつた事には種々理由もあつたが、今度本科理事會よりの懇望により、又既に豫科山岳部も獨立した今日、本科が獨立する事に何等の不都合も見出さない故に、本日の一橋本科會定期評議員會の席上にて正式の部に加

入す。(山岳部側より小林、望月、森川出席す。)

記 錄 (八月)

- (1) 楠島——赤石岳——悪澤岳——西俣 (八・一・一七) 大塚
- (2) 尾瀬——燧岳——日光 (八・五・一・一) 驚崎
- (3) 三峯——御經平——太陽寺 (八・九・一・〇) 柿原、森川
- (4) 箱根早雲山、神山 (八・一・三) 日江井、齊藤
- (5) 蔦谷——藥師岳——黒部——上高地 (八・一・六・一・二) 吉澤、村尾兩氏、小谷部
- (6) 鋸岳——大岳 (八・一・七・一・八) 水田 他一名
- (7) 愛鷲山縦走 (八・二・三) 大塚
- (8) 海澤より大岳 (八・二・五) 岩崎
- (9) 梅峰——濱平——二子山 (八・二・八・一・三) 林、岩崎

故宮川雄二郎君紀念文庫並に一橋山岳部基金設立報告

宮川家より多額の金員の御寄贈あり、その一部を以て既に御承知の追悼錄を作り、他の一部は針葉樹會計へ繰入れたり、併し部員協議の結果紀念の爲に左記書籍を購入し宮川文庫と名付け、中島文庫と共に永く部に遺すことせり。右費用の大部は部會計より、その小部は針葉樹會計より支出せり。

スワイズ日記 Kangchenjunga Adventure

先 蹤 者 Mountain Essays

針葉樹八號會計より金八拾圓、一橋山岳部會計より金貳拾圓、

合計壹百圓を安田貯蓄銀行新宿支店へ据置貯金とし、部基金を設立せり。使用目的、方法其他未定なり。

消 息

矢作太郎君 丸善株式會社本店(日本橋區通二丁目)に轉任  
五十嵐數馬君 野村證券株式會社本店(大阪市東區安土町二丁  
目)に轉任、兵庫縣西ノ宮市常盤町十七に轉居  
渡邊九郎君 三菱銀行京橋出張所(京橋區築地四ノ二築三ビル  
内)に轉任、杉並區大宮前六ノ三九二に轉居

河相薰君 メルボルン兼松商會(Lombard Bldg. 17, Queen  
St., Melbourne)に歸任

園山徳三郎君 矢口水道株式會社(蒲田區小林二三一)に轉任  
太田又一君 大阪市住吉區駒川町四丁目八 池北方に轉居  
定例集會 九月十八日 於如水會館

出席者(會員) 中川 矢作 吉澤 村尾 松木 近藤 高橋  
久保田 金田 高瀬 吉澤 増山 小柳(部員) 林 柿原 小  
谷部 望月 森川 小林 新羅 岩崎 日江井 關根 出席者  
に會報五十八號を配つたので、改良意見が出る。恒例お月見を別  
項の通りに決定し小柳幹事に下検分を依頼する。更にこの席に始  
めて出た關根修君(專二)を紹介する。

編 輯 後 記

中島、中川兩氏の原稿は先月分として載いた處、都合で本號に  
載せました。時日に喰達のあるのは右の次第ご諒承下さい。